

グッド・プラクティスから臨床倫理を捉え直す －組織的視点から－

宮崎大学 医学部医学科 社会医学講座生命・医療倫理学分野 教授
宮崎大学医学部附属病院 病院長補佐
中央診療部門 臨床倫理部 部長
板井 孝壱郎

伝統的な「医の倫理」をめぐる状況は大きく変貌し、もはや現場の医療従事者が「粉骨碎身、私生活を犠牲にして身を捧ぐ」ような「精神主義的な」職業倫理観では、臨床現場で生じるさまざまな倫理的課題に到底対応できないばかりか、それでは多くの医療従事者がバーン・アウトしてしまい、病院の経営自体が成り立たない時代となりました。

組織として「倫理」を考える際には、個人の「英雄的努力」に矮小化しないことが重要です。「病院機能評価 3rd G」においても、「第1領域 患者中心の医療の推進」「1.1.6 臨床における倫理的課題について継続的に取り組んでいる」かを評価するに際して重要なポイントは、「臨床倫理の課題を病院として検討する仕組み」が構築されていることであると記されています。また、「第2領域 良質な医療の実践1」「2.1.11 患者・家族の倫理的課題等を把握し、誠実に対応」しているか否かを評価する項目においては、「ともすると倫理の問題は特殊なケースと考えがちであるが、医療行為が基本的に侵襲のあるものであることを考えれば、ことごとく倫理的な側面を持っているとも言えるものであり、意識的にその問題を考える組織風土が重要である」と明記されています。

病院のガバナンス体制の中心軸として「組織倫理」をどのように位置づけられるのか、そして全職員に対し「倫理の問題が特殊なケースではない」という認識を周知徹底し、常日頃から「意識的にその問題を考える組織風土」を院内に構築することができるかどうかが、病院運営においては避けられない課題となっています。「患者に善かれ」と思う“善意”からでもあったにしても、重要な法律や倫理ガイドラインの存在を認識せず、多職種で構成されたチームも介在しない、個人的な「独断・独善」によって「思いやり」が「思い込み」に変貌したスタンド・プレーがなされるなら、それは重大インシデントとなります。また、責任感のあるスタッフほど、問題を自分独りで解決しようと抱え込んでしまい、「倫理的感受性 ethical sensitivity」の高い医療従事者であれば時にバーン・アウトさえしてしまいます。こうした事態を「未然に防ぐ」という倫理コンサルテーションにおける予防倫理 preventive ethics としての機能と、質の高い医療実践を担保する患者安全 patient safety としてのリスク・マネジメント業務は、極めて相関が高い組織的機能です。

本講演では、「安全・安心な医療」は「倫理的な医療」そのものであるという観点から、道徳的苦悩 moral distress を抱え込んだ病院職員が燃え尽きないように、そして倫理的感性 ethical sensitivity を高めつつ、倫理的ジレンマ ethical dilemma に遭遇した際に「倫理的に感じる」だけでなく、「倫理的に考える」能力である倫理的推論 ethical reasoning をトレーニングしうる倫理ガバナンスのあり方について概説します。